

研究報告

台湾での講演と視察の報告 — 國立臺北藝術大學での電子音楽レクチャーと Taiwan Sound Lab — Report on Lecture at Taipei National University of the Arts and Site Visit to Taiwan Sound Lab

渡邊 愛

Ai WATANABE

昭和音楽大学

Showa University of Music

概要

國立臺北藝術大學でのレクチャー「重現日本電聲音楽作品之檔案方法建構論」と臺灣聲響實驗室(以下、Taiwan Sound Lab)への視察について報告する。2023年5月11日、筆者は國立臺北藝術大學を訪れ、日本の電子音楽およびそれらのアーカイブ構築に関する課題についての講演を行った。そこで指摘されたのは日本の電子音楽に関する情報へのアクセスのしにくさである。大学や研究機関におけるネットワーク、また、アーカイブの公開方法が今後の課題として挙げられる。翌日5月12日には、IRCAMとの提携のもと2018年に設立された音響のための文化施設、Taiwan Sound Labを視察した。本発表では同施設視察と併せて台湾の音響制作の動向も報告する。

This is a report about the lecture “Methodological construction of archives for re-performance of Japanese electroacoustic music works” at Taipei National University of the Arts and subsequent visit to Taiwan Sound Lab. On May 11th, 2023, the author visited the Taipei National University of the Arts to give a lecture about Japanese electronic music and the issues encountered when archived. During the lecture, the difficulties in accessing information about electronic music in Japan were explained. Networks among universities and research institutes, as well as methods of opening archives to the public, were cited as issues to be addressed in the future. The next day, the author visited the Taiwan Sound Lab, a cultural facility for sound, established in 2018 in partnership with IRCAM. This report includes a summary of the visit to the facility, as well as trends in sound production in Taiwan.

1. はじめに

2023年5月11日、筆者は國立臺北藝術大學にて、レクチャー「重現日本電聲音楽作品之檔案方法建構論」を行なった。このレクチャーは同大学で電子音楽を教える陳家輝助教のクラスの受講生を主な対象者として、筆者が現在取り組んでいる研究テーマ「日本の電子音響音楽作品における再演のためのアーカイブの方法論構築」における話題を中心に講義したものである。講義では筆者の来歴と研究領域を簡単に説明した後、アーカイブの重要性と日本電子音楽協会におけるアーカイブ・プロジェクトの取り組みについて示し、アーカイブの先行事例や問題点を報告した。アーカイブされたコンサート記録の音源や映像、スタジオの様子なども紹介した。翌日5月12日には陳助教の案内により Taiwan Sound Lab を訪問した。Taiwan Sound Lab は臺灣當代文化實驗場(以下、C-LAB)がフランスの IRCAM と協定を結び2018年に設立したサウンドアートのための施設である。この日は施設内を視察した後、2023年秋に本公開を控えた公演《逆断口》のプレビューに立ち会った。本稿ではレクチャー、視察の順に報告する。

1.1. レクチャー概要

実施日 2023年5月11日(木)15:30-17:00

実施場所 國立臺北藝術大學音楽系音楽二館 M2501 室

登壇者 渡邊愛

1.2. 視察概要

実施日 2023年5月12日(金)



図 1: レクチャーのポスター

実施場所 C-LAB 臺灣聲響實驗室

施設見学

実施時間 14:30-15:00

プレビュー公演《逆断口 Re-Fracture》

実施時間 15:00-16:00

出演者 鄒瑩霖 謝光圀 (パフォーマンス) 鄭道元 (サウンド制作と演奏) 蕭育禮 (プログラミングと演奏)

2. レクチャー

2.1. 研究領域の紹介

レクチャーは筆者の来歴紹介から始まり、博士論文の研究テーマ「リュック・フェラーリの電子音響作品における逸話の構造」の説明に移った(渡邊, 2016)。当該論文ではフランスの作曲家、リュック・フェラーリ (Luc Ferrari; 1929-2005) の電子音楽作品を研究する上で、フェラーリが直接作業したデジタル・オーディオ・ワークステーションである ProTools に着目し、そのデータ・ファイルを利用して作品分析を行い、フェ



図 2: 《逆断口》プレビュー公演パンフレット (《逆断口》Re-Fracture 第二階段呈現, 2023)

ラーリの提唱した逸話的音楽の特徴を明らかにした。具体的には、フェラーリに関する資料の多くを管理する Association Presque Rien (プレスク・リヤン協会) およびブリュンヒルド・フェラーリ氏(リュック・フェラーリ未亡人)よりデジタルデータアーカイブの提供を受け、フェラーリがデジタルのシステムを使用していた晩年の作品である《逸話的なものたち》《Paris-Tokyo-Paris》を題材に、その作品の成り立ちを音素材であるオーディオ音源の解析と編集プロセスの調査によって明らかにし、音楽的特徴と逸話的な表現との接点を探った。この経験から筆者は電子音響音楽におけるアーカイブの重要性を認識し、マテリアルの適切な保存と管理が当該領域において発展の明暗を分けることを強調した。

2.2. 日本の電子音響音楽と日本電子音楽協会

次に、日本における電子音楽のあゆみを簡単に説明した。日本で初めてのミュージック・コンクレート作品として知られる黛敏郎の《X・Y・Z》を紹介し、電子音楽制作のハブとして放送局が担っていた役割やNHK電子音楽スタジオについて触れた。いっぽうで教育機

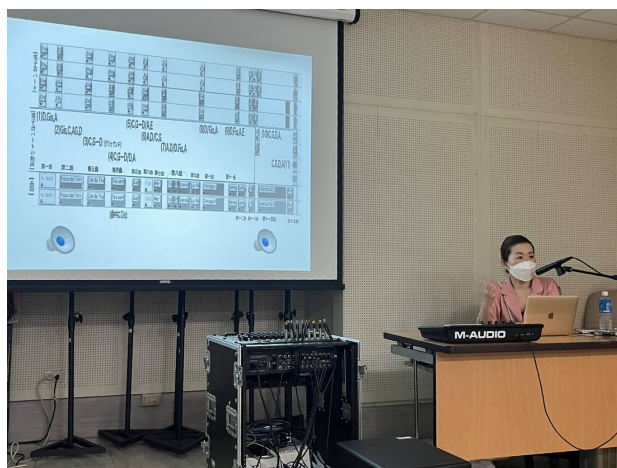


図 3: 筆者登壇の様子

関の擁する電子音楽スタジオについても解説し、東京藝術大学の音響研究室の様子を紹介した。NHK 電子音楽スタジオは国内外から日本の電子音楽にアクセスするポートとしての意義も果たしたが、90年代にその幕を閉じたことはアーカイブの観点からみても損失であったといえる。受講生の中にも、NHK 電子音楽スタジオのことは知っているがその他の日本の電子音楽の組織については知らないと話する人がいた。続いて日本電子音楽協会（以下、JSEM）および JSEM アーカイブ・プロジェクトの紹介に移った。JSEM は電子音楽の公演事業を中心に活動を続け、2022 年に創立 30 周年を迎えたが、30 年という歴史は短いようで長い。技術は変化し、関係者も年を取り、多くを忘れるに十分な月日である。これまでの活動を未来に繋げるために何をどのように保存管理していくべきか検討することは重要であると述べた。

2.3. アーカイブ・プロジェクト

JSEM では 2020 年にアーカイブ・プロジェクトを立ち上げ、この活動によって現在では 37 の公演、約 147 作品がデータ所蔵されている。講義ではリストの一部をスライドで示し、公演ごとのナンバリングや録音・映像データのデジタル化について言及した。また作品タイトルやジャンル、必要機材などの詳細情報のリストも紹介し、電子音響音楽独自のアーカイブの方法を模索すべく参照した先行事例についても触れた。WDR や IRCAM など欧米の事例のほか、アジアのネットワークである EMSAN の例を挙げつつ、日本の状況に応じたフレームワークの構築を模索していると報告した（水野, 2020）。特に作品上演形態と作品形態の分類は多岐に渡り、上演に関する項目を明確化することは再演時に有効であることを強調した。権利処理や関係者へのヒアリングについても言及し、作品創作および

上演の記録と管理は受講生にとっても今日の問題であることが共有できた。レクチャーの最後には 2022 年に行なったコンサートアーカイブについてのシンポジウムにも触れ、アーカイブ化されたいいくつかの作品の一部を視聴した（鈴木, 2023）。特に 90 年代の作品群についての反応が良く、紹介機会の少ない日本の作品を届ける意義を確認した。質疑応答では、現在コンピュータで創作活動をする作曲家として何をどれだけ保管すれば良いかという質問や、JSEM のような電子音楽に関する組織が日本にあることを初めて知ったため、今後はより作曲家や作品にアクセスしやすい環境の整備や国外とのネットワークの強化を期待したいといった提言も受けた。また、アーカイブにまつわるトピックで 90 分のレクチャーが埋まってしまう、筆者自身の作品をまったく紹介できなかったため、筆者の作品を聴きたかったという嬉しい声も届いた。台湾の学生の新しい作品に対する関心の高さと貪欲な向学心に触れることができた。

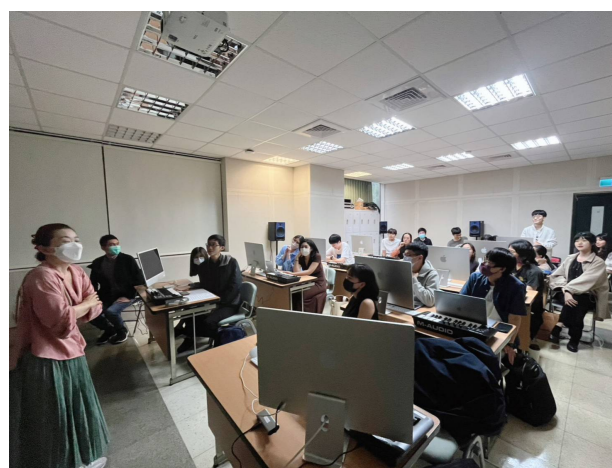


図 4: 質疑応答の様子

3. 視察

3.1. C-LAB と Taiwan Sound Lab

翌日は C-LAB の Taiwan Sound Lab を訪問した。C-LAB は文化的実験と社会的革新を促進し、文化の未来を探究する体験を提供することを指針として、文化部傘下の台湾生活芸術基金会のもと 2018 年に設立された（C-LAB 園區簡介, 2020）。台北市内に位置する C-LAB は、かつて台湾総督府の工業研究所として使用されていた旧空軍司令部を拠点としている。アート、テクノロジー、社会の発展を目指し、研究開発と実用化の両面からさまざまなプロジェクトを推進しており、これらの目的のために「コンテンポラリーアート・プラットフォーム」「オーディオ／ビジュアル・メディア・プ

プラットフォーム」「ソーシャル・イノベーション・プラットフォーム」の3つのプラットフォームを設立した。このうちのオーディオ／ビジュアル・メディア・プラットフォームは、実験的で学際的なニューメディア・アートを奨励しており、抽象的なコンセプトと実用的なテクノロジーとの相乗効果でメディア・テクノロジーがアートや文化的生産にどのような影響を与えるかを探求している。さらに、実験的なプロジェクトをバーチャル・スペースやオンライン・コミュニティに拡大し、文化コンテンツ開発の推進に応用されている。文化とテクノロジーの相互関係を形成することで、台湾と国際社会とのニューメディア・アートを通じた交流を促進させるという目的がある。このような背景のもと、C-LAB はフランスの IRCAM (Institute for Research and Coordination in Acoustics/Music) と協定を結び、Taiwan Sound Lab を共同設立した。Taiwan Sound Lab は、サウンドテクノロジー、芸術、文化の統合、科学的アプローチによる台湾のサウンドアートの発展を目指し、人材育成、共同制作、研究開発、展示、パフォーマンスを通じて、芸術、テクノロジー、研究の分野を超えた交流を実施している。台湾初の没入型サウンドシアター空間である Spatial Audio Field を備えており、2019 年に完成した同システムは 49.4 チャンネルのスピーカーを備える。このほか、様々な芸術創作に対してエンジニアによる技術的なサポートも行っており、アーティストが多様なテクノロジーを使用することを促進している。視察では Spatial Audio Field のほか、クラスがちょうど終わったあとの教育スタジオ、身体表現や造形表現に使用される広いスペースなどの施設を見学した。イマージブスタジオでは陳助教も制作を行なったことがあるという。1964 年に白青如が撮影したサイレントドキュメンタリー映画「台北の朝」の再解釈というプロジェクトで、オリジナルの音素材をベースに、アンビソニック技術で作られた現代の台北のサウンドスケープ（台北橋、萬華中央漁業市場、艋舺の龍山寺、圓山など）を組み合わせる際にこのスタジオが使用された。1960 年代の台北を異なるイメージから再体験するこのプロジェクトは、奇しくもアーカイブの発展的活用という筆者のテーマにも重なった。

3.2. 《逆断口》プレビュー内覧

《逆断口 Re-Fracture》は 2023 年 10 月 21 日から 22 日まで台中国立歌劇院との共同制作により上演された舞台作品である。当作品のプロトタイプを一部上演する内覧会が視察日に行われ、参加することができた。当作品は異なる分野で創作する 3 名のクリエイターが対話をしながら制作を進めるプロジェクトで、振付を葉于瑄、サウンドデザインを鄭道元、装置の構築を蕭育禮が担当した。fracture、つまり骨折はある出来事や



図 5: Spatial Audio Field

力が加わった後に残されるもので、物体に起こった出来事全体の記録ともいえる（《逆断口》Re-Fracture 第二階段呈現, 2023）。骨折の解析は時間と空間の逆探索のようなものであり、切断された時間と空間の不連続性が三者の相互依存によって模索される、という意味が Re-Fracture のタイトルには込められている。全体で三幕あり、第一部は音の断片が連続的に進行する規則性のあるセクション、第二部は規則性が解体され、断片が引き伸ばされ、切断され、反転し、移動するという脱構築的振動のセクション、第三部はオリジナルとの差異と収束を探る試みとして、同じ音の断片を使い、変調させたものとのコントラストに焦点を当てたセクションである。この日は第二部のみのプレビューで、スタジオの中央に鄭道元と蕭育禮が向かい合う形で音響パフォーマンスとシステム制御を行い、ダンサーはスタジオ内に点在する観客の間を縫うようにして踊る。ダンサーの身体にはデバイスがつけられ、空間情報、加速度、回転など、演者の身体の動きによって生み出される信号をキャプチャして収集し、身体の動きを観察することに主眼が置かれている。受信した身体信号は音響の鄭にも送られる。インダストリアルなサウンドは分裂と統合を激しく繰り返す。パフォーマンスの前に行われたトークでは、信号を受信するデバイスは誤行錯誤が繰り返されており、たとえば医療用聴診器を

ヒントに心音や脈拍などをとらえる電子聴診器も検討されたが、感度の適切な調整方法が困難であるため保留となっていると説明された。このように、アートとテクノロジーの共創という C-LAB が掲げるコンセプトは台湾の実験芸術においてアクチュアルな動向であり、C-LAB 設立当初からのコアプログラムであるクリエイターズ・プログラムによって創作された多くの文化実験プロジェクト同様、今後も学際的な共同制作や異業種協力が推進されることが予想される (文化実験三年索引, 2020)。



図 6: パフォーマンス前のトーク風景

4. おわりに

國立臺北藝術大學でのレクチャーでは、日本の電子音響音楽に対する情報へのニーズがあるにも関わらず、組織的なまとまりが見えづらく、作曲家や作品へアプローチしづらい現状があること、また創作活動に活用するためにアーカイブの方法論を必要とする声や、国際的なネットワークの強化という要望があることが明らかになった。また、C-LAB および Taiwan Sound Lab の視察を通じて、台湾が文化革新へかけるリソースの規模を肌で感じ、台湾の音響制作の現在地を確認することができた。日本の電子音響音楽においては、アーカイブおよびその方法論の公開を利活用に資する形で探ること、大学や研究機関におけるネットワークを国外にもアピールすることが求められている。

5. 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP22K00219「日本の電子音響音楽作品における再演のためのアーカイブの方法論構築」の助成を受けて行われているものである。



図 7: 陳家輝助教と筆者、Taiwan Sound Lab の前で

6. 参考文献

- 臺灣當代文化實驗場. 2023. “《逆斷口》Re-Fracture 第二階段呈現.” https://drive.google.com/file/d/1Ssw0gq2Q_mLTmY9ss1hwpw63-nj58tL4/view. Accessed February 9, 2024.
- 渡邊愛. 2016. 「リュック・フェラーリの電子音響作品における逸話の構造」, 東京藝術大学, 平成 27 年度, 甲第 799 号.
- 水野みか子. 2020. 「日本の電子音響音楽アーカイブについてー日本電子音楽協会アーカイブ・プロジェクトの経過報告ー」『先端芸術音楽創作学会会報』 Vol.12 No.3 pp.12-16.
- 鈴木悦久, 渡邊愛. 2023. 「シンポジウム「電子音楽におけるアーカイブの方法論ーコンサートアーカイブにおける実践的視点からー」開催報告」『先端芸術音楽創作学会会報』 Vol.14 No.1 2023 pp.6-9.
- 臺灣當代文化實驗場. 2020. “C-LAB 園區簡介.” <https://clab.org.tw/en/publish/c-lab-introductionbrochure/>. Accessed February 9, 2024.
- 台湾生活芸術財団. 2020. “文化実験三年索引.” <https://clab.org.tw/en/publish/creators-2018-2020/>. Accessed February 9, 2024.

7. 著者プロフィール

渡邊愛 (Ai WATANABE)

東京藝術大学、昭和音楽大学、玉川大学各非常勤講師。日本電子音楽協会理事。先端芸術音楽創作学会会

員。女性作曲家会議メンバー。東京音楽大学大学院、
パリ国立地方音楽院修了。東京芸術大学大学院博士後
期課程修了。博士(学術)。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営
利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されていま
す。ライセンスの写しをご覧になるには、[http://
creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/](http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/) をご覧頂くか、
Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA ま
でお手紙をお送りください。